
禁煙パイポでダイエット

長原 絵美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁煙パイポでダイエット

【ZPDF】

Z9082S

【作者名】

長原 紘美子

【あらすじ】

「「めんね、私バカだからよくわかんないわ。でも、どににいたつて、私たち一番の友達よね」（魔法のよらんどより転載）

グリ子がやつてきたのは、待ち合わせ時間からもう三十分を過ぎたときだつた。

僕はおしゃれな喫茶店の前で一人、何度も腕時計を見ては溜め息をつき、そろそろ彼女に電話してみようかと待ち合わせ場所を離れかけた。

「「じめーん！　おまたせ」

グリ子は人混みを搔き分け、息を切らせて走ってきた。

「遅い！」

僕はもう一度腕時計を見た。グリ子は、あわててそれを手で遮る。そして僕が愚痴り出すより先に、彼女は僕の腕に自分の腕を絡ませて、念押すようにもう一度強く「「じめん」といつと、ニッコリと笑つた。

僕はそれ以上文句が言えなくなつた。

「いいよ、どうせいつものことだしさ」

自分に言い聞かせるように呟いた。

「……あれ、グリ子、髪切つた？」

今頃になつて、グリ子の髪型が変わつていることに気付いた。変わつているなんてもんじゃなく、背中まであつた髪がぱぱり切り落とされて、ずいぶん印象が変わつていた。

「うん、ちょっと気分転換にね。似合つ？」

「全然」

僕が即答すると、グリ子はうれしそうに笑つた。

「良かつた！　こんなに似合つて言われたら、泣くしかないわよね」

そしてあちこち元気跳ねる髪を無造作につかんで、憎々しげに引つ

張つた。

本当はよく似合つていた。もともと男っぽい性格だつたし、どちら

らかというとロング・ヘアが似合うような美人でもなかつた。短い髪のほうが、活動的なグリ子らしかつた。

「で、気分は変わつた？」

「そうね、それまで原因不明でブルーだつたのが、今じゃはつきり原因のあるブルーに変わつたわ」

髪を引っ張る力をさらに強めて言つた。もしかすると、そういうて早く髪を伸ばそうとしているのかもしれない。

「それは良かつた」

僕が笑うと、グリ子も照れたように笑つた。耳元でパンダ型のピアスが揺れた。しばらく彼女の少年のような笑い顔に見とれていると、グリ子は僕の腕を軽くつづいてきた。

「ねえ、モリナガ君。私おなかすいちゃつた」

「あ、ごめん。じゃあ、入ろうか」

そして僕達は喫茶店に入つた。

後になつてよく考えてみれば、一緒にランチをという約束に遅れてきたのは彼女のほうだつた。いつも僕は、彼女の笑顔にだまされてしまう。

僕たちは陽の当たる窓際の席に、向かい合わせに座つてウエイトレスを待つた。しばらくしてウエイトレスがトレイに水とおしべりをのせて、メニューを持ってきた。

「何にする？」

グリ子はメニューを最初から最後まで一通り目を通すと、「オレンジジュース」とだけ言つてメニューを閉じた。

「それと？」

「それだけ」

僕には訳がわからなかつた。彼女がおなかがすいたと言つて出したのだ。

「ダイエットしてるのよ。モリナガ君は気にせず食べてね」

そう言われても、一人だけ吃べるのは気が引けて、結局僕もコーヒーだけを頼んだ。

ウエイトレスは、この忙しいランチタイムにオレンジジュースと「一ヒーだけを注文した僕達を嫌そうな目で見下ろし、注文を繰り返さずにメニューを持って奥へ下がった。

「さてと、ワケを話してもらおうか」

「遅刻の？」

僕が切り出すと、一瞬グリ子の目が泳いだ。

「とぼけるなよ。なんで仕事やめたの」

僕はいつになく強い態度で身を乗り出した。今日はその話を聞くために出会ったのだ。

「……聞きたい？」

「そりや、まあ。せっかく三十倍……だけ？ そんな倍率を突破してお役人になったのに」

グリ子はぎゅっと奥歯をかんで俯いた。何から、どう話せばいいのか考えているようだった。

「向いてなかつたのよ、そういうの。規則、規則、規則……でね」たしかに、グリ子は束縛されることを嫌う人間だった。そして強調性も適応力も欠けていた。

グリ子はじつくりと頭の中で言葉の順序を組み立てて、慎重に話し出した。

「私だって、最初は慣れようと努力したわ。これは仕事なんだからって割り切つて。こうニッチコリ笑つて、何言われてもはいはいつて言って。お金をもらつてる分だけの仕事は完璧になしてたと思うの」

僕にはちょっと信じられなかった。彼女のようにプライドの高い人間にも愛想笑いができるなんて。

「で、疲れちゃつた……と」

グリ子は顔を上げて僕を見つめた。どちらかといふと睨めつけるように。

「それでもがんばったのよ。自分のやりたいことは自分の稼いだお金でやるんだって決めてたから。でもね、どうしても許せないこ

とがあつたの」

「へえ……？」

グリ子は少し声のトーンを落として、周りに聞こえないように続けた。

「きれいな人のことを『きれい』って誉めちゃダメなの」「はあ？」

グリ子の黒い瞳は悔しさで揺れていた。僕もその馬鹿げた理由に言葉を無くした。

「お役人は全ての人に平等じゃなきゃいけないの。それはわかるんだけどね……。きれいな人を『きれい』って誉めると、差別なんだって。きれいな人は良くなつて、きれいじゃない人はダメっていうふうに、差別になっちゃうんだって」

僕が呆然としていると、グリ子は皮肉を含ませて笑つた。

「あいつら、ちょっとおかしいのよ。でも、あそこではそういう決まりなの」

先程の無愛想なウエイトレスがコーヒーとオレンジジュースを運んできた。彼女は何も言わず僕たちの前にそれらを置いて、伝票をテーブルに放り投げた（僕にはそう見えた）。

グリ子は一気にオレンジジュースを半分飲んだ。僕も少しコーヒーをすすつた。

「でね、そんな連中が飲み会のときに鍋奉行やつてた私にこう言ったの。『おまえ、病気持つてないだろ？』って」

僕はやれやれといつた具合に肩をすくめた。ジーンズのポケットからタバコを取り出し、グリ子にもすすめてみた。グリ子は、「私はこれがあるから」と言つて、カバンから禁煙パイポを取り出した。

「禁煙？」

グリ子は笑つて首を振る。しばらく見ないうちに、本当に彼女はよく笑うようになった。

「これもダイエット。口が寂しいときにくわえるの。飴やガムだと糖分が含まれてるし、タバコは体に悪いから」

なるほど、と僕は唸つた。彼女の発想は凡人の僕とは少しずれていた。

「自分が思つたことを正直に口に出せないので、結構ストレスが溜まるのよ」

グリ子は再び話を戻した。

「でも、一番下つ端の私が規則や上司に逆らうわけにもいかないじゃない。だから言いたいこと我慢して、へらへら笑つて他人のご機嫌ばかり伺つて……」

「おまえがねえ……」

「私だつてそれくらいのことはできるわよ」

「本当に？」

僕は少し苦いな、と思いながら「コーヒーをそのまま飲み続けた。グリ子はまた俯いてしまった。

「……だんだん、仕事とプライベートの区別ができなくなっちゃつたけど」

僕はグリ子が昔と変わらず不器用なままだとわかつて、少しだけ安心した。

よく笑う彼女は、僕を置いて大人になつてしまつたんじゃないかと心細くなつていたところだった。

「ねえ、モリナガ君、知つてるでしょ？」

「何を？」

「私が自分勝手だつてこと」

僕は大きくうなづいた。誰よりよく知つている。

「私はね、他人のご機嫌をいちいち気にかけていられるほど器用じゃないの。私はただ、自分の思うように生きていく。だからね、このままじゃいけないって思ったの。それでやめたのよ」

そこまで言い切ると、グリ子はようやくこの一年間のうつぶんを全て吐き出したようで、とても晴れやかな顔に変わった。

「なんだかんだ言って、結局は私のワガママなんだけどね」

そう言つて微笑んだグリ子は、やはり僕より少し先に大人になり

はじめてくるようだ。

「……で、これからはどうするの」

グリ子は首を振った。何も決めていないらしい。

僕は溜め息をついた。彼女はどうして僕と付き合っているのだろう。

「グリ子」

「ん?」

彼女はグラスの氷をストローでつついて、僕と皿を合わそうとしない。

「おまえってさ、いつもそうだよな」

「何が」

「だから……その……」

僕は以前からずっと思っていたことを訴えようとしたり。けれど、いざとなるとうまく言葉が出てこない。

なるべく彼女を怒らせないようにこと気をつけた。

「……大切なことをひとりで決めてしまつてさ。誰にも相談せず」

に

グリ子は黙つて僕の子供染みた不満を聞いていた。

「俺さ、おまえと一緒に大学に行くつもりだつたんだけどさ。いつになつたら大学決めるんだろつて思つてたら、就職決まつたつて言いに来るし。そうかと思えば今度はやめたつて言うだろ」

僕はずっと悔しかつた。彼女から悩み事らしきものを打ち明けられたことは、一度もなかつた。

グリ子と僕は考え方がずいぶん違つたし、当時から僕のほうがかなり幼かつたのだから仕方ないのだけれど。

「いつも事後報告なんだよな」

僕はつい吐き捨てるように言つてしまつた。

グリ子は反論しようと言葉を選び始めた。僕たちに共通しているのは、話し方がとても不器用だということだけかもしない。

「だって、みんな反対するじゃない。私、そんなに強くないから、

みんなの反対押し切つてまで自分の思うようにできなによ

「でも、相談くらいしてくれたっていいだろ。もしかすると考え

が変わるかもしれないし」

グリ子は強い目で僕の目をのぞき込んだ。僕も負けないように彼女の目を見た。

「変えたくないのよ。私、いつもそのときそのときで一番いいと思うことしかしてないのよ。そりや、後悔することもあるけど……。でも、何だって最終的には自分で決めなきゃいけないじゃない？ それなのに私が『これだつ！』って思ったこと以外にいいことがあつたら、私決められなくなっちゃうわ」

僕は何も言い返せなかつた。

グリ子はすまなそうに謝つた。

結局、僕達はどちらも子供なんだ。

「……出ようか」

僕はテープルの上の伝票を握り締めた。

「おごり？」

「はいはい」

僕達は喫茶店を出てしばらく街を歩いた。

「あのさ」

「ん？」

信号待ちの間に、僕はずつと言あうがどうしようか迷つていたことを彼女に話してみることにした。

「俺、九州に行くことにしたよ」

グリ子はひどく驚いた。

「大學の時の先輩が小さな会社を作つてさ、人手が足りないから来てくれないかって言われてるんだ。だから……」

「イヤだ、行かないで！」

今度は僕が驚いた。まさかそんな反応が返つてくるとは思つていなかつた。彼女は僕の腕を強くつかんで、目を潤ませながら何度も首を振る。

「え……？」

僕が戸惑っていると、彼女は腕を離して微笑んだ。今日一日の中で、一番素敵なお顔だった。

「……って言えばいいのかな。それとも、『がんばって』って言えばいいのかな」

「グリ子……」

僕は改めて彼女の不器用な優しさを感じた。

「ごめんね、私バカだからよくわかんないわ。でも、どこにいたつて、私たち一番の友達よね」

グリ子が差し出した手を握り返してうなずいた。

「ああ。……落ち着いたら手紙書くよ」

そして僕たちはわかれだ。

その後、僕達はお互いに風の便りで消息を確認しあつたけれど、僕は結局一度も手紙を出せないまままでいる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9082s/>

禁煙パイポでダイエット

2011年10月9日00時48分発行